2005年3月1日

セミナー通信　Ｖｏｌ．１３１　西村セミナールーム

主宰　西村　和彦

短絡的な解決策に走るな

世間の「ゆとり教育反対」の大合唱に文部科学省も異例の方向転換を迫られてしまったようです。どうも教科書を厚くするとか、土曜の授業を増やすとか、基礎反復練習を増やすとかという方向に進みそうです。

私自身「ゆとり教育」と言われるものには問題を感じていましたから、今回の方向転換に反対はしませんが、いま出ている解決策はどうも本質を突いているとは思えません。どちらかと言えば、現状をあまり認識していない短絡的な発言ばかりが目立つような気がします。

中学で教える歴史の中に「御家人が借金を返せなくて困っているから徳政令で借金を棒引きにする。」や「都市に農民が出稼ぎにしているから農村に戻す。」という方策が出てきます。しかしこれらはことごとく失敗しています。「一時的に借金を棒引きにすることで二度と商人がお金を貸さなくなること。」や「なぜ農民が都市で現金収入を稼がなければならなくなったのか。」を考えての解決策ではなかったからです。

およそこの世の中で起こっている問題点は、数多くの原因が複雑に絡み合い、流れる時間のなかで生じているわけで、あるひとつの法律を制定することや昔の制度に戻すことだけで解決することはできないと思います。

いわゆる「学力低下」という問題は、単に勉強時間が短いから起こったというわけではないと思います。確かに問題集をこなす量により向上する学力もあるでしょうが、それらは早く結論を出す訓練に偏重しがちで、「じっくり考える」ことのできない子供を増やしているのではないかと思います。ゲームなどで素早く反応し、ボタンを押すことで高得点が得られるものばかりやっていると、考えることが面倒と感じるようになる気もします。

なぜ分数計算ができなくても大学に進学できたのか、なぜ就職しなくても特に困らない若者が増えたのか、なぜ子供たちが人の話を聞けなくなったのか、なぜ課題の提出物を期日までに出さなくても平気なのか、なぜ学校の先生を尊敬しなくなったのか。

これらのことは直接的には関係がなさそうですが、私はすべて有機的につながりあって現状を形作っていると思います。

現状・現場を調査すること、対立する意見に耳を傾けること、一般の人々の常識や意識の変化に注目すること、こうした様々な要因を調査・分析することがまずは必要ではないでしょうか。そのうえで今後のこの国を支えていく若者にどのような教育制度を構築するかを考えて欲しいものです。早く答えを出さなければいけないという周りの要求があまり強くなりすぎると、結果として誤った判断をすることにもなりかねません。